

rooms といった対句、animated & inanimate を区別しない価値観は、ディクソンが漱石の訳を流用した論文

“Chōmei and Wordsworth: A literary Parallel”(1893)においてanimistic という形容詞の登場を促すだろう。そのうえ a motion and a spirit, rolling through all things といったフーズワース起源の語彙は、「石で口を漱ぎ、流れを杖」とする孫子荆の逸話を彷彿とさせる。Dikson との『方丈記』翻訳を巡る対峙や葛藤は、作家「漱石」の誕生とも密接に絡まっていた。文末数行の翻訳上の言い訳は、坪内逍遙の沙翁「院本体」訳に対して漱石が漏らす不満を予告する。加藤周一の『自由太刀余波鋭鋒』への「文献解題」(「翻訳の思想」『日本近代思想大系』)と併読すれば、浄瑠璃と西洋悲劇の相性のなさ、「不実な美女が忠実な麗女か」(米友方里)の相克に漱石が寄せた感慨も復元できよう。

このさき『方丈記』は F. Dikson と南方熊雄の共訳から Henry David Thoreau (1817 - 1862) の Walden (1854) への遐想を呼び、隠遁生活の古典として『世界文学』へと仲間入りすべく、さらに飛翔してゆくだろう。『方丈記』はインドの仏典ほかと並んで、大英帝国治下の東洋古典文学翻訳シリーズのうちに位置づけられることとなる。

*ゴウランガ・チャラン・ブラダラン氏博士論文公開発表会(総合研究大学院大学・国際日本専攻・基盤機関・国際日本文化研究センターにて2019年1月31日実施)に取材し、当日の講評における発言を備忘録として要約した。

折って(偶像崇拜たる)仏壇に捧げる。それはたしかに「デクソン」先生の眼には、自然の棄損、現行不一致の「矛盾」inconsistency と映るだろう。長明は自らがその命を絶った草花、「生命なき自然」inanimate nature に、なぜか唯一無二の「共感」sympathy を寄せるのだから。だが思えば nature is dead の逆説には「静物画」nature morte の観念、自然を「死せるもの」と捉える西洋の Vanitas 観が透けて見える。これに反して仏教の厭世者、「悲観癖」pessimistic な長明は、生物と無生物をも包含する「自然へと逃避」した fled to nature 。

ここには外国人教師の期待の地平に寄り添いつつ、装った詭いの裏に本音を隠した修辞の屈曲がある。Bellamy のユートピア小説の流儀で「隠遁」recluse を嘲笑し、フーズワースに肖って長明を嘲る ridicule 欧米の輩たち——。これら「出撃して敵を探すことを美德と心得る人々」とは、文化的宣教を使命として極東日本に到来した外国人教師への、辛辣な当て擦りだろうが、かれらの「生」と「人間」への執着を見透かし、その議論を底割れさせる返し技。それが漱石の方丈記解説隨筆の骨子をなすのではあるまいか？

ここで漱石は Shakespeare 『風』の栄枯盛衰の叙述を動員し、Oliver Goldsmith のバラッドに見られる、巡礼者への脱俗の誘いを巧みに引用する。これらの詩句も、周到に『方丈記』を弁護する。さらに驚くべきは、この Essay で早くも、将来『草枕』で追求される「人でなし」の「諦念」renunciacion や「人間嫌い」misanthrop、「世捨て人」志向が、長明に投影されていることだ。加えて「花や巖」flowers and

連載192
『方丈記』の「世界文学」仲間入りに、夏目金之助はいかに関与したのか？
フーズワースの汎神論 H. D. ソローの隠遁生活の傍らに鴨長明を位置づける

国際日本文化研究センター
総合研究大学院大学
英文学専攻
教授 松岡 雅夫
稲賀繁美

鴨長明『方丈記』(1212)を最初に(部分)英訳したのは、夏目漱石だった。『全集』26巻に原文・和訳が収められているが、万人周知の事実ではあるまい。夏目金之助は明治24年すなわち24歳のおり、東京大学の前身、文科大学校英文科学生として“A Translation of Hōjōki with a Short Essay on it”を Dec. 8, 1891 の日付で提出している。所望したのはは外国人教師の James Main Dixon (1856 - 1933)。24歳で来日し、離日後は南カリフォルニア大学で日本研究の基礎を築く。来日は特命全權公使を務めた上野景範 (1845 - 1888) の仲介によるらしい。当時、工部大学校(後の工学部)には Henry Dyer (1848 - 1918) はかの同郷人もいた。伊藤博文や山尾庸三を含む所謂長州 Five の Glasgow 人脈が感じられる。長老派の宣教師も含め、大英帝国の辺境たるスコットランド出身者は、多く極東に派遣された。

漱石は『方丈記』など、今日からみれば「幽霊」apparition 然たる代物だと卑下してみせる。長明には Wordsworth のように自然のうちに霊的 spiritual なものを見出す見識もなく、その厭離穢土の志向も、人生に対する逃避姿勢が少なくない。金之助はかのように長明の「欠点」foibles and shortcomings を絶対の基準に仏教文学を値踏みする。Dikson への、金之助の側の偽装工作、戦術的誤歩だろう。

駐日英語圏知識人たちは、おしなべて仏教的自然観に対する蔑視を隠さない。またフーズワースは大自然を汎神論的に擬人化した。ところが野の花の命を惜しんだ英国詩人とは違って、日本の隠遁者は花を手